F. Scott Fitzgerald の初期短編にみる女性観

稗　方　康　夫

序論

F. Scott Fitzgerald は 1920 年 3 月に初の長編小説 *This Side of Paradise* を出版し、その商業的成功により一躍流行作家となった。また彼はこの時期に *Saturday Evening Post*(以下 *Post* と記す) をはじめ多くの短編を雑誌に掲載し、傑作と呼ばれる短編の多くはこの時期に書かれた。Fitzgerald 短編の第一黄金期といってもよいだろう。

Fitzgerald の初の短編集 *Flapper and Philosopher* は 1921 年に出版された。これは 1920 年の *This Side of Paradise* の出版に続いてのものである。Scribner 社の出版方針により、Fitzgerald は長編を一つ発表したあとそれに続く形で短編集を発表しており、このスタイルは最後まで変わらなかった。短編集に収められる作品の選定には Fitzgerald 本人も深く関わっており、彼自身による作品の評価を図る一つの目安にもなっている。当然この時期に出版されながら *Flapper and Philosopher* に収録されなかった作品も多くあるが、それらのいくつかは決して軽視することのできない質の高さを備えている。

Flapper and Philosopher が出版されたとき、Fitzgerald は 24 歳、Zelda と結婚し、ジャズ・エイジの旗手として若い世代から圧倒的な支持を得ている時期であった。Fitzgerald 夫妻が、そしてアメリカが華やかに青春を謳歌しているこの時期の短編の多くにはフラッパー(Flapper)と呼ばれ、髪を短く切った当世風ファッションの若い娘たちがヒロインとして登場した。ジャズ・エイジの旗手、1920 年代の流行作家というイメージを Fitzgerald に定着させたのは *This Side of Paradise* とこれらの短編群であり、"May Day"のような深刻なリアリズム小説ではなかった。Fitzgerald は通俗的な小説を書かなければならないことに不満を覚えながらも、その原稿料が Zelda との豪奢な生活を支える収入源となっており、数の上でははるかに勝ることもまた否定できない事実である。本稿ではこれらの短編におけるヒロインたちの人物像を検討したいと思う。

"The Ice Palace" and Post Stories

初期短編の最高傑作の一つである"The Ice Palace"は Sally Carol Hopper の物語であり、*Saturday Evening Post* に掲載された短編のひとつである。この短編はまず南部三部作(Southern Trilogy)の一作目、そして最高の作品として Fitzgerald の南部への共感を表現した短編として現在では確固たる評価を得ている。しかし *This Side of Paradise* が主人公 Amory Blaine のアイデンティティ探求の物語であったように、"The Ice Palace"にもヒロインである Sally Carol のアイデンティティ探求の物語としての側面があることを忘れてはならない。(1) 青年期とは男女を問わずアイデンティティを確立するための時期でもあるのだ。作品の冒頭、Sally Carol がけだるそうに外を眺めていると友人クラークの乗った古いフォードがやってくる。

> [...].This was the city of Tarleton in southernmost Georgia, September

afternoon.

Up in her bedroom window Sally Carrol Happer rested her nineteen-year-old chin on a fifty-two-year-old sill and watched Clark Darrow's ancient Ford turn the corner. (*Before Gatsby*, p. 187、以下ページ数のみ示す)

しかし Sally Carol は向上心のない南部の男性とは結婚したくないと思っており、Clark Darrow にこのように告げる。"Clark, I don't know. I'm not sure what I'll do, but—well, I want to go places and see people. I want my mind to grow. I want to live where things happen on a big scale."(191) Sally Carol には向上心があるのだ。美しさや華やかさだけでなく、Fitzgerald が女性の向上心も同時に描いていることは見過ごされてはならない。

そして彼女は北部の男性 Harry Bellamy と婚約して北部に行く。しかし彼女は寒さが厳しく陰鬱な北部になじめず、南部人としての、そして夏の申し子(summer child, 194)としての彼女のアイデンティティは揺らぐことになる。ことのほか寒い夜、Sally Carol は Harry とともに氷の宮殿を見に行く。Harry や北部人たちは氷の宮殿を賞賛するが、南部人の Sally Carol にはその喜びを共有することができない。そしてその氷の宮殿に置き去りにされたとき、彼女は北部は自分のいるべき場所ではないと痛感する。皮肉にも、北部にやってきてあらためて自分が南部人であり、南部を愛していることに気付くのである。

Clark Darrow—he would understand; or Joe Ewing; she couldn't be left here to wander forever—to be frozen, heart, body, and soul. This her—this Sally Carrol! Why, she was a happy thing. She was a happy little girl. She liked warmth and summer and Dixie. These things were foreign··foreign.(207)

自分が好きなのは雪や氷ではなく、暖かさや夏なのだと彼女は思う。そしてその気持ちは南部人の Clark　Darrow ならわかってくれるが、北部人たちにはわからないのだと知る。この経験は彼女の自己発見であり、ある種のイニシエーションであるといえるだろう。北部に来ることにより彼女は新しい何かではなく、自分が南部人であるというもともと自分が持っていたアイデンティティを再確認したのである。そして彼女は以下のように叫ぶのである。

"Oh, I want to get out of here! I'm going back home. Take me home"···her voice rose to a scream that sent a chill to Harry's heart as he came racing down the next passage··"to-morrow!" she cried with delirious, unstrained passion··"To-morrow! To-morrow! To-morrow!" (208)

このカタストロフがこの作品のクライマックスであり、Sally Carol は氷の宮殿の中では、すなわち北部では南部女性としての自分のアイデンティティが確立できないことを実感し、自分の本来の居場所である南部へと帰っていくのである。ところでこの"To-morrow,

To-morrow, To-morrow"は Shakespeare の *Macbeth* の５幕５場での Macbeth の言葉と似ており、Fitzgerald が *Macbeth* の一行を借用することで Sally Carol のカタストロフを表現しようとしたとも考えられる。

結局 Sally Carol はアラバマへ帰ってくる。そして"The Ice Palace"は以下のような結末で終わる。

> [...].It was April afternoon.
> Sally Carrol Happer, resting her chin on her arm, and her arm on an old window-seat, gazed sleepily down over the spangled dust whence the heat waves were rising for the first time this spring. She was watching a very ancient Ford turn a perilous corner and rattle and groan to a jolting stop at the end of the walk. See made no sound and in a minute a strident familiar whistle rent the air. Sally Carrol smiled and blinked. (BG, 208)

この結末の場面が、季節は９月から４月に変わっているものの冒頭の場面とそっくり同じであることに注目したい。このことは Sally Carol が自分が南部の人間であることを再確認したものの結局は堂々巡り(circular)の状態であり、現状を打破したいと思いながらも結局のところ根本的な解決には至っておらず、現状に甘んじていることを表現しているといえる。Sally Carol のアイデンティティ探求は、再び南部に戻ってきてそこが自分の居場所であると改めて実感してひとまず終了することとなるのだ。(2)

その他、*Saturday Evening Post* に掲載された作品では"Head and Shoulders"の Marcia、"The Offshore Pirate"の Ardita、"The Popular Girl"の Yanci、"The Camel's Back"の Betty などのヒロインがいるが、これらのヒロインたちはみな気が強く、わがままで無責任である。たとえば"The Offshore Pirate"の Ardita は、断髪であり、恋人の Carlyle(この名前は偽名であり、本名は Toby)がいかに苦労して今の地位にたどり着いたかという話に退屈して眠くなってしまうわがまま振りである。Sally Carol は他のヒロインたちほどには男性の登場人物を無慈悲に傷つけることはないが、やはり他のヒロインたちと共通する気質も備えている。このような *Post* の短編で描かれたヒロインたちの当世風なイメージが、Fitzgerald が２０年代初頭に作り上げたフラッパー像であり、流行作家としての Fitzgerald 像であるといえるが、そこには女性のアイデンティティ探求の側面もまたあることも忘れてはならない。

"Benediction"

Saturday Evening Post に華やかなヒロインたちが描かれている一方で、編集者に H.L. Mencken を擁し、知的水準の高い読者層を持っていた *The Smart Set* に掲載された短編にも女性を主人公とし、女性の青春を描いたものがある。"Benediction"がそれで、全体を通じて根底にはカソリシズムが流れているが、この作品は若く美しい女性 Lois のアイデン

ティティ探求とエゴイズムの物語としても読むことが可能である。

Lois は兄の Keith に会うために男子修道院を訪れる。以下は修道院の少年たちをみた Lois と Keith のやりとりである。

> "Are these young men happy here, Kieth?"
> "Don't they look happy, Lois?"
> "I suppose so, but those young ones, those two we just passed--have they--are they---?
> "Are they signed up?" he laughed. "No, but they will be next month."
> "Permanently?"
> "Yes--unless they break down mentally or physically. Of course in a discipline like ours a lot drop out."
> "But Kieth, they don't know what they're doing. They haven't had any experience of what they're missing."
> "No, I suppose not."
> "It doesn't seem fair. Life has just sort of scared them at first. Do they all come in so young?" (102)

年老いた母の世話のために自分の青春を犠牲にするべきではないと思っている Lois は、修道院の少年たちの青春が、かつて兄の Keith がそうであったように、神への奉仕(service)に奪われていることに疑問を感じている。少年たちがアイデンティティの探求をすることもなく、彼らの若さが修道院の中で浪費されることに Lois は悲しみすら覚えているのかもしれない。この場面に「若さの浪費」に対する批判が提示されていることは確かである。

そして Lois は、賛美式(Benediction)の途中で倒れてしまったあと、Keith に"I guess the truth is I'm not much used to Benediction. Mass is the limit of my religious exertions."(106)といっている。そしてそのあとはっきりと"I don't want to shock you, Kieth, but I can't tell you how—how *inconvenient* being a Catholic is. It really doesn't seem to apply any more."(106)という。Lois はこの言葉をもってカソリック的価値観と決別したのである。そして兄と別れて修道院を去り、いままでどおり俗世間で生きることを選ぶ。

異世界でアイデンティティを確立することができず、元の世界に戻るという点で、Lois は北部という異世界からもともとの居場所である南部に戻る"The Ice Palace"の Sally Carol に通じる。また"Benediction"は冒頭と結末がともに電話局の電報デスクであり、始まりと終わりが同じ場所という点でも"The Ice Palace"に通じるものがある。結末の場面で交際していた既婚男性に決別を言い渡す電報を送ろうとする(結局破ってしまうのだが)点では現状から一歩踏み出したといえる Lois だが、それも彼女の今後を明確に示すものではない。Sally Carol と同様に、Lois もアイデンティティ探求を試みたが現状を抜け出すことはできなかったのである。

"Bernice Bobs Her Hair"

"Bernice Bobs Her Hair"は「ポスト」誌に掲載され、*Flapper and Philosopher* に収録された短編のひとつである。成立の背景には Fitzgerald が妹に宛てた手紙があるといわれていて、当世の流行に敏感であった Fitzgerald ならではのフラッパー指南書ともいえる作品である。(3)研究者たちの評価も Fitzgerald 本人の評価も高くはない作品だが、無視することのできない要素を含んでいる。

美形ではあるが洗練されていないため男性に人気の出ない Bernice に、いとこの Marjorie が女はどうあるべきかを説く。Marjorie の話に納得できない Bernice は"What's a little cheap popularity?"(244)というが、Marjorie は"It's everything when you're eighteen"(244)と当時の流行をそのまま表現した答えをする。Bernice が Louisa M. Alcott の *Little Women* の一節を引用すると、Marjorie は"Oh, please don't quote 'Little Women'!"そして"That's out of style." (246)と一蹴する。Marjorie が Bernice に指南する「カットインされる女」のイメージは 1920 年代初頭の流行作家 Fitzgerald の描く女性のイメージであり、"The Offshore Pirate"の Ardita をはじめとする他の作品のヒロインたちと共通するものである。

しかしながら、この作品は当時の流行の女性観を礼賛するだけのハッピー・エンディングの物語ではない。その側面にこそ注目したい。周囲の話題を集めるべく当世風フラッパー娘のように勇気を出して断髪した自分を鏡で見て Bernice はこう思う。

> It was ugly as sin--she had known it would be ugly as sin. Her face's chief charm had been a Madonna-like simplicity. Now that was gone and she was--well frightfully mediocre--not stagy; only ridiculous, like a Greenwich Villager who had left her spectacles at home. (256)

"The Offshore Pirate"などの作品ではむしろ美点として描かれていた断髪が Bernice の目には"ugly as sin"として写る。"Bernice Bobs Her Hair"には、当時の流行を華やかに描く一方で、Fitzgerald が抱いていた「ヴィクトリア朝的女性らしさ」(Victorian womanhood)へのエレジーが描かれているのである。(4) 当時の女性たちの流行を礼賛していた Fitzgerald はときとして風刺的でもあったのだ。(5)その風刺が *Post* に掲載された作品にさえあらわれていたことは、流行文化と青春を謳歌する流行作家としての Fitzgerald のステレオタイプ的な女性観への反論として注目されるべきである。そしてその方法がまさにフラッパー的ではあるが、Bernice は自分自身の価値観を見出そうと試みたのであり、その点でも彼女もまた Sally Carol や Lois と共通しているといえるだろう。Fitzgerald の登場人物たちはみな、金や地位と同様に、自己定義すなわちアイデンティティも求めていたのである。(6)

"Lees of Happiness"

"Lees of Happiness"は 1920 年 7 月に執筆され、12 月に *Chicago Tribune* に掲載された。*Flapper and Philosopher* には収録されず、*The Tales of the Jazz Age* の「収録されなかった傑作」(Uncollected Masterpieces)の項に収録されたことを考えても、*Flapper and Philosopher* に収録された *Post* の短編とは扱いが異なることがわかる。この作品は、小説家の Jeffrey と女優 Roxanne の Curtain 夫妻の物語である。小説家とその美しい妻ということで、Fitzgerald 本人と Zelda と重ね合わせることができるかもしれないが、そう考えるとこの作品の結末は二人の人生を予見していたかのようでもありあまりにも皮肉である。

作品のはじめでは、二人は"they were young and gravely passionate; they demanded everything and then yielded everything again in ecstasies of unselfishness and pride"(363)と描かれている。Jeffrey の友人の Harry Cromwell (彼は自分の妻 Kitty とはうまくいっていない) も、Roxanne を"as young as spring night, and summed up in her own adolescent laughter...A good match for Jeffrey, he thought again." (363)と思う。ところがそのあとすぐに、"Two very young people, the sort who'll stay very young until they suddenly find themselves old." (363)とあるのだ。いま Roxanne は若く生気にあふれているのだが、ここで Harry が老いは少しずつではなく突然やってくるといっている点に注目したい。作品の冒頭近くでこのような記述があることがこの短編の展開を暗示している。

そしてこの作品では「老い」はまさに突然、そして残酷な形でやってくる。Jeffrey の脳に腫瘍ができ、彼は植物状態になってしまう。その後の Roxanne を取り巻く状況は "subdued her and made her indelibly older" (363)なものだった。*Post* の華やかで幻想的な短編とは全く異なる展開である。そして時は経ち、Jeffrey の死後、Roxanne は "thirty-six--handsome, strong, and free." (376)となった。若く美しかった Roxanne はいまや３６歳になった。ヒロインが３６歳になるなど、1920 年当時の Fitzgerald の小説ではめずらしいことである。しかも、Roxanne は夫の死後宿屋の女主人としてその家にとどまることを決意する。その Roxanne の姿には加齢をただ嫌悪するだけではなく、その後の人生に痛ましくも前向きに立ち向かっていく強さがある。

そして結末では、離婚した Harry と Roxanne がポーチで涼んでいる。彼が去ると、"To these two, life had come quickly and gone, leaving not bitterness, but pity; not disillusion, but only pain" (379)と語られる。人生、つまり青春は「哀れみ」(pity)や「痛み」(pain)だけを残してあまりにも早く過ぎ去るのだ。"Lees of Happiness"は、Fitzgerald が青春の絶頂にいた 1920 年にすでに青春の終焉を自覚していたことのあらわれではないだろうか。Fitzgerald 本人は"Lees of Happiness"についてはこう述べている。

Of this story I can say that it come to me in an irresistible form, crying to be

> written. It will be accused perhaps of being a mere piece of sentimentality, but as I saw it, it was a great deal more. If, therefore, it lacks the ring of sincerity, or even of tragedy, the fault rest not on with the theme but with my handling of it. (361)

Roxanne がこの町に宿屋の女主人としてとどまるという姿勢には、若く美しいがわがままで無責任な *Post* のヒロインたちのエゴイズムとは一線を画すものがあるといえるだろう。"Lees of Happiness"の主題は華やかさや流行ではなくその喪失の悲しみと青春の終焉にこそあり、この悲劇的な結婚生活は *Tender Is the Night* など後期の作品の主題ともいえる。(7)流行作家として一世を風靡している 1920 年に、Fitzgerald が女性の老い、突然終焉を迎える青春など人生の悲劇的な側面を描いていたことを考えると"Lees of Happiness"はもっと評価されてよい作品である。

"The Cut Glass-Bowl"

"The Cut Glass Bowl"は執筆が 1919 年 10 月、出版が 1920 年 5 月である。この作品は *Flapper and Philosopher* に収録されているが、主人公 Evylyn が結婚しており、すでに 27 歳、子どももいるという設定である。彼女が作品中でだんだんと歳をとっていく過程が描かれ、老いを意識しているという点を考慮すると *Flapper and Philosopher* 他の作品とは異彩を放っているといえる。

そして Evylyn の浮気が夫の Harold に発覚してから 8 年後、Evylyn はこのように描写されている。

> Concerning Mrs. Harold Piper at thirty-five, opinion was divided--women said she was still handsome; men said she was pretty no longer. And this was probably because the qualities in her beauty that women had feared and men had followed had vanished... Back in the days when she revelled in her own beauty Evylyn had enjoyed that smile of hers--she had accentuated it. When she stopped accentuating it, it faded out and the last of her mystery with it. (115)

いまでも美しいかもう美しくないかは男女で意見がわかれているが、はっきりといえることは、若いときに持っていたものが 35 歳になった今では失われているということである。"Lees of Happiness"の Roxanne の若さは突然失われたが、この作品では Evylyn の若さは、"She might have been youth and love for both--but that time of silence had slowly dried up the springs of affection and her own desire to drink again of them was dead"(115)とあるようにゆっくりと失われていく。ところが 30 代ではゆっくりと思われた若さの喪失は、40 代になると"If Evylyn's beauty had hesitated in her early thirties it came to an abrupt decision just afterward and completely left her ... She was forty-six"(123)とあるように、突然その速度を増す。「カットグラスの鉢」では、若さはあるときはゆっくりと、またあるときは突然に、しかしいずれにせよ、去っていくのである。Evylyn は"She yawned

again…life was a thing for youth. What a happy youth she must have had! She remembered her pony, Bijou, and the trip to Europe with her mother when she was eighteen…"(124) と自分が 18 歳の頃（*Post* のヒロインたちは大体このくらいの年頃である）を思い出し、あの頃は幸せだったと思う。「人生は若者のためのもの」(life was a thing for youth)というのはいかにも 1920 年の Fitzgerald らしいフレーズだが、それを"The Offshore Pirate"の Ardita のような若い女性ではなく 46 歳になった Evylyn がいっているところにこの作品の特徴がある。

さらに、Evylyn が失うのは若さだけではない。Roxanne が夫を失ったように、娘はカットグラスの鉢で手を切ったのが原因で右手を切断することとなる。さらに息子は戦死してしまう。ここに両者の「喪失」という共通点をみることができる。そして結末では、Evylyn は自らを"fate"(126)と名乗るカットグラスの鉢をかかえて玄関から階段の下へと転落してしまう。愛人にもらったカットグラスの鉢とは Evylyn にとって不幸の象徴であったのだ。

このように、ハッピー・エンディングな物語の若く美しい *Post* のヒロインたちの影には、Roxanne や Evylyn のように人生の悲劇に向かっていくヒロインたちもまた描かれていたのである。*This Side of Paradise* のようなジャズ・エイジを謳歌する長編を書いていた一方では、このような悲しい物語も書いていた Fitzgerald の二面性は見落とされるべきではない。

その他にも "O, Russet Witch"という短編では、書店で働く主人公 Merlin とヒロインの Caroline の若さがだんだんと失われていく過程が描かれている。Caroline も奔放、人騒がせなヒロインだが、彼女も作品の最後では時が経ち老婆となっている。老いなど永遠にやってこないかのように思わせる華やかな初期短編群のなか、登場人物の老後を描いているという点では"O, Russet Witch"も注目に値する。(8)

結論

Fitzgerald の初期短編群には、ジャズ・エイジと青春を謳歌している若く美しいヒロインたちが華やかに描かれている一方で、女性が人生を模索するアイデンティティ探求の物語としての側面があることを見落としてはならない。また、中後期の主題である青春の終焉や喪失の悲しみに直面している女性たちも 1920 年の短編ですでに描かれており、Fitzgerald は 20 代前半にして人生の享楽的な側面だけでなく、悲劇的な側面にも目を向けていた作家だといえる。1920 年代前半の Fitzgerald の女性観は決して一面的に語られるべきではないといえるだろう。

註

1) John Kuehl は以下のように述べている。"A six-part narrative, "The Ice Palace" is structured around a quest ofr identity." (Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study*

of the Short Fiction. New York: Twayne Publishers, 1991, 34)

2) John Kuehl は作品中の技巧について述べたのち、"The Ice Palace"の項を以下のように結んでいる。"These techniques seem perfectly suited to "The Ice Palace," whose heroine confirms her identity in an orderly world." (Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1991, 39)

3) 参照：Fitzgerald, F. Scott. *Before Gatsby: The First Twenty-Six Stories*. Univ of South Carolina Pr., 2001, 237.

4) Susan F. Beegel は以下のように述べている。 "This ambivalence of Fitzgerald's [about the gender socialization of the 1920s] makes "Bernice Bobs Her Hair" his jazz elegy for *Little Women*, for the passing of Victorian womanhood, regretting and not regrettied." (Bryer, Jackson R ed. *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories*. Univ of Missouri Pr, 1996, 73)

5) Robert Roulston と Helen Roulston は以下のように述べている。"By 1920 Fitzgerald was already the self-appointed chronicler of the Jazz Age and the bard of the flapper, alternately taunting the older generation and mildly titillating the younger, and satirizing as well as celebrateing the debutant and her Ivy League quarry." (Roulston, Robert and Helen Roulston. *The Winding Road to West Egg: The Artistic Development of F. Scott Fitzgerald*. Bucknell Univ Pr, 1995, 50)

6) Robert Roulston と Helen Roulston は ""The Ice Palace" and The *Saturday Evening Post*"の項を以下のように結んでいる。"Those other characters too are concerned about money, status, and self-definition. In short, all are like Scott and Zelda and like millions of readers of the Saturday Evening Post."(Roulston, Robert and Helen Roulston. *The Winding Road to West Egg: The Artistic Development of F. Scott Fitzgerald*. Bucknell Univ Pr, 1995, 64)

7) John Kuehl は"Lees of Happiness"について以下のように述べている。"The tragic marriage motif that will dominate Fitzgerald's fiction in the 1930's and that will culminate with Tender Is the Night has already surfaced, as has so much else, in these apprentice stories." (Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1991, 32)

8) 参照：Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1991, 28-29.

参考文献

Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The life of F. Scott Fitzgerald 2nd ed.* Univ of South Carolina Pr, 2002.

Bryer, Jackson R ed. *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories*. Univ of Missouri Pr, 1996.

Fitzgerald, F. Scott. *Before Gatsby: The First Twenty-Six Stories*. Univ of South Carolina Pr., 2001.

Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1991

Roulston, Robert and Helen Roulston. *The Winding Road to West Egg: The Artistic Development of F. Scott Fitzgerald*. Bucknell Univ Pr, 1995.

佐伯泰樹 「若さの喪失、夢の終焉」 "The End of Youth, The Death of Dreams – The World of Fitzgerald's Short Stories in His Twenties". 東京工業大学人文論叢 18 (1993.3) 189-199.

野崎孝編 『２０世紀英米文学案内７：フィッツジェラルド』研究社、1966 年